

環境教育で広がる森の世界

信州大学教育学部 教授 渡辺隆一

1 はじめに

私は信州大学教育学部で環境教育と野外活動を担当していますが、元々はブナ林などの森林生態学を研究対象としています。今日は、林業関係者の研究会ですが、森と林業が実際の教育現場でどのような位置づけでどのように扱われているかを、最近普及してきた環境教育の視点から紹介します。

2 環境教育の歴史

戦後の急速な経済成長による環境悪化は全世界的な規模に拡大し、スモッグなどの深刻な健康被害をも引き起こすようになってきました。その対策として1972年に、ストックホルムで国連による初の「人間環境会議」が開催され、環境問題の真の解決には環境教育が重要なことがうたわれました。1975年には環境教育専門家による国際会議が開催され、「ベオグラード憲章」と言われる世界共通の環境教育の枠組みが策定されました。

この憲章は貧困や戦争と言った世界の現状認識から環境教育の理念や目的をとき、環境問題の解決のために個人および社会に必要とされる「環境への関心、知識、態度、技能、評価、参加」の6つの教育目標を明示するなど、環境教育の考え方の基礎として今日でも高く評価されています。以来、世界各国で環境教育の普及が急速に進められた。しかし、日本では正式な教科やカリキュラムになることはなく、一部の熱心な教師による実践が行われるだけでした。

こうした世界的な環境改善の取り組みにもかかわらず、地球温暖化や酸性雨など、環境問題は一層の拡大と深刻さを増してきたことから、改めて1992年にブラジルにおいて「国連・環境と開発サミット」が開催されました。そして日本でも文部省が1992年によく「環境教育指導資料」を作成し、「環境教育担当教員研修会」を開催するなど環境教育の普及を公的に実施し始めたのです。

3 環境教育とは何か

環境教育はごく簡単に言えば「環境問題を解決するための教育」です。具体的には「地域や地球の環境の現状を認識し、各自なりの判断と評価に基づき、解決のための活動に参加すること」で、そのためには各自なりの「環境価値観」を主体的に形成することが必須です。環境価値観とは、例えば車の利便性と排気ガスの汚染との価値を判断する基準であり、環境保全のためには何が優先されるべきかといった選択を、個々人が主体的に行うことでもあります。

ここでいくつかの例をあげてみますから環境のために一番大事だと思う事項に手を挙げてみて下さい（以下、5つの選択肢を示し、それぞれに会場から手を挙げてもらう）。この選択肢には正解はなく、人それぞれによって環境価値観が異なっているということがわかる。個々人の価値観を尊重しながら共通の社会的合意を得ることが環境問題の解決には重要だとわかります。また、合意を得るには実に多くの関係者の様々な工夫と協力がが必要なこともわかるでしょう。

次に学校現場での環境教育の実際についていくつか紹介します（赤潮や密猟、焼き畑など環境教育で使われる環境問題の現場写真を紹介しながら）。

4 環境教育での森や林業の扱い

小中高等学校での教科書における森や林業の扱量は近年急速に減少してきています。それは国内一次産業の衰退を反映し、同時に国の工業化政策を反映してもいます。しかし、近年は森や水田の環境保全作用の重要性を評価すべきだと強く批判され、理科の教科書に「人間と地球環境」などが載るなどして農林業の環境保全の役割が一部は取り上げられるようになってきました。

教科ではない環境教育は、教科や教科書にとらわれずに地域や地球の環境問題を幅広く自由に取り扱います。そのテーマの中でも「森」は比較的多く扱われ、日本環境教育学会での発表キーワードにおいても「森」は常に5%近い発表割合となっています。また、「林業」そのものを扱った発表数は少ないのですが、キーワードとしては林業体験、林業普及事業など専門用語9語（全2454語の中）が収録されており、紹介はされてきています。

しかし、環境教育での実際の森や林業の扱いには大きな問題があります。例えば地球環境問題の事例として文部省の環境教育指導資料では「温暖化」など6テーマがあげていますが、その1つが「熱帯林の破壊」です。中学社会科で「熱帯林の伐採、是か非か」と言うディベートによる学習を、学会で事例発表していました。

環境教育は特定の教科ではないので、熱帯林問題を、森の生態から世界貿易の問題まで総合的に学習できる点は評価できますが、環境保全が優先するため、どうしても森を守ろう、という学習になります。その結果、森を伐る林業は悪いことといった感想や評価になりがちです。実際に、そのような授業を行って、父兄の林業者から抗議を受けた小学校の例があったといます。その後の話し合いでこの先生は林業の正しい実態を知り、森と人間生活との本来の関係にまで授業を発展できたという良い結果を生むことになりましたが。

5 希望としての環境教育

今回、このカラマツ林業研究発表会での調査研究の発表を聞いて、改めて林業に関して多大な努力と工夫とが行われていることを知りました。しかし、多くの県民にとって、林業は森以上に未知の世界です。「業」としてのかかわりがあって初めて健全な森林の維持管理が行われることを学ぶ機会は、これから週5日制になる学校ではますます減少してしまいます。

そこで、林業関係者の方々には、ぜひ森と人間とは業を通して現実的につながっているということをもPRしていただきたいのです。石油のような使い捨ての資源にいつまでも頼るわけにはいかないこと、美しい森を維持しながら木材を資源としても利用してゆけることをぜひ社会に広く伝えて欲しいと思います。

先に述べたように、環境教育での森の扱いは、現在は明らかに保護に偏っています。しかし、環境教育は最終的には個々人の環境への参加を促す学習です。現実的に森を守るためには、「資源としての森・環境としての森・文化としての森」などを、人間との間でバランスよく成立させることが必要だと学習することになります。それは実際に森に入り、森を学び、森の資源である木材を生産し、その材から椅子を作り、大切に使うことで、森の恵みを実感することです。今後、環境教育にはそうした進展を大いに期待できると思います。まだまだ日本では始まったばかりの環境教育ですが、皆様の協力で適切な森林の学習が全国の学校で行われるようになればと願っております。

<参考文献>

「環境教育指導資料（小学校編）」（1992）：文部省，大蔵省印刷局

「環境教育指導資料（中学校・高等学校編）」（1991）：文部省，大蔵省印刷局

「環境教育指導資料（事例編）」（1995）：文部省，大蔵省印刷局